

「食」を通して消費と生産の場を結び直し文化を守る

—イタリア社会運動訪問・交流報告(1)スローフード運動—

前号でお知らせした通り、今号よりイタリア社会運動訪問・交流の報告を連載します。第1回はスローフード運動。応対してくれたのは、イタリア中部の街ペルージャのスローフード協会の「責任者」(みんなに任されたという意味での責任者なのだそうです)であるサルバトーレ・デ・イヤーコさん。地元のホテルのレストラン長を勤めるサルバトーレさんは、運動的には10月下旬に迫った協会のビッグイベント、トリノでの「見本市」の準備、そしてそれに向けて近くの街で開催中のお祭り、個人的には「奥さんが病気で、16ヵ月の子供の世話をしなければいけない」という超多忙ななか駆けつけ、誇りと情熱を込めてスローフード運動について語って下さいました。

◆アソシエーションではなく運動

まず、イタリアのスローフード協会がどういうふうに誕生したかということですが、一人の人物—カルロ・ペトリーニという協会の創始者で現会長—から始まっています。その人と彼の考えを支持する4人の人たちの支えによって、1985年にこの運動が始まりました。当時がどういう時代だったかということ、特に食品、食べるということに関して味の画一化・平準化が全面化していた時代で、それに危機感を持って、何とかこの状況から失われていく味だとか産品、文化を救いたい、そういう意思から始まっています。したがって、それは当然のことながら味とか生産システムの画一化・平準化に対抗するものとして、マクドナルドに典型的に象徴されるファーストフードの生産システムとか味のあり方に対抗する運動として、象徴的な形で出発したわけです。

(注1)

私はスローフードの活動を、「アソシエーション」ではなく「運動」と呼びたいと思っています。「アソシエーション」というのは、一つの組織体で、トップがいてある規則があって、それに皆従うような形の組織体のことです。スローフードはそういう形の組織体ではなくて、もっといろいろ各人が、それぞれ自由に行動しながらゆるやかにつながっていくという意味で、「アソシエーション」ではなく「運動」と呼びたいと思うのです。

イタリアのスローフード運動では、それぞれの地方のそれぞれの町に組織があって、それを

コンディデュウムというんですが、その名はイタリア語の一緒に生きるという意味の動詞からきており、一緒に生きる、一緒にいる場所というところから組織の名前がつけられています。

で、その責任者はフィドゥーチャリオと呼び、もともと「お医者さん」という意味です。医者といっても非常に広い意味での医者で、「その地域のいろんなことを知っていて、面倒を見る人」という意味です。どういう形で面倒を見るかという、要するに彼はその地域のお医者さんなわけですから、その地域のいいところとか悪いところをよく知っている。例えば、その地域に生きている動物種や植物種とか、チーズはどういうふうに作られているとか、作っている人はどういう人であるとか、それがどこのオステリア（庶民的な地元の料理を出す店）とかレストランでどう使われ、どう料理されているとか、そういうことをよく知っているわけです。

【写真】写真中央がサルバトーレ・デ・イヤーコさん



#### ◆楽しみながらつなぎ合わせる

スローフード運動は、戦略としてまずオステリアのガイドを作りました。最初の一番具体的な仕事でした。当時、オステリアは時代遅れなものに見なされて、どんどんなくなっていっていました。そこで、あえてオステリアを再評価して、ガイドを出すことによって、口伝てであそこではこういうものが食べられるということが伝わっていくわけです。その時に同時に、そこでどういう生産物がどういうふうに料理され作られているかということを、ガイドを仲介に知ってもらうことによって、消費者と生産者の間の関係を新しく結び直すことが、オステリアガイドを作った一番の眼目でした。

それから、なくなりつつある食品や食文化、農産品について、「味のノアの方舟」を作りました。ノアの方舟で動物種を救うというのと同じ意味で、動物種ではなくいろんな産品を救おうという趣旨です。救うには、その産品についてより多くの人に知ってもらわなければいけない。どういうふうにして知ってもらうかということで、具体的に三つの実践—「ラボラトリー」「マスター」「味の教育プログラム」の三本建てでやっています。

「ラボラトリー」は、ある産品について、生産者とシェフを呼んで、実際に料理するところを見て、それを食べて、みんなでそれについて語り合うということをやっています。「マスター」は、それぞれ一つのテーマのコースが 25 あって、チーズ、サラミ、肉、オイルなど、それぞれのテーマに従って、どういうふうに作られているかとか、どういう状況にあるかとか、どういう種類があるかとか、実際に講師を呼んで味見とかをしながら学んでいくという内容です。もう一つの「味の教育プログラム」は、子供たちに対する味覚教育プログラムで、小・中・高校生を対象に、学校で味覚教育を行っています。他にも夕食会を企画して、そこにその日に出てくる食材の生産者をみんな一緒に呼んで、生産者と消費者が一緒にお酒を飲んで食べながら語り合うということもやっていて、これは非常に好評で参加者が多いです。

こういう形で、実際にその産品に触れたり食べたりして、それについてみんなでしゃべり合うことによって、味覚というものに対する意識を目覚めさせようと、そういうことです。さらに、それを通じて、しゃべり合うことの中で、生産と消費の場をもう一度つなぎ直していこうという、楽しみながらつなぎ合わせていくことが目的です。

救おうとしている産品をどういう形でより広く知ってもらうかということで、「味の見本市」もトリノで始めました。今年も 10 月 21~25 日までトリノで開催します。世界中の失われつつある産品を、見本市という形でより多くの人々に知らせることによって、その場を通じて新しい流通のネットワークを掘り起こす場として見本市があります。見本市としては他に、これもトリノで開催している「スローチーズ」、ジェノバの「スローフィッシュ」があります。この三つがスローフード運動でやっている大きな見本市です。

見本市に関連して、今年から「母なる土地」という企画を新しく始めました。トリノの見本市の関連イベントとしてやります。世界 50 ヶ国から 5000 人の農民が集まって、それぞれの地域の生産物を、その場で新しく市場開発するための機会とし、新しい文化的・経済的交流を創り出そうという趣旨です。

#### ◆生産量を制限して守ることも

こうした様々な活動の結果として、例えば、ウンブリア州のある湖の近く一帯で取れる豆が、非常に生産量が少なくなっていたのが、5 倍に増えました。ところが今度は、人気が出てくると売れるからということでどんどん生産量が増えるんです。しかし、この豆はその土地の環境の制約の中でしか生産できないので、ある一定の量になったら、生産量をブロックしてしまいます。そういう形で、知られることによって逆にその生産が潰れてしまうのを救うということも、やっています。

また、生産基準を新たに設けるということもやっています。例えば、産業的に大規模生産されるチーズは、全て生乳ではなく加工乳を使って作られているんですけども、それを生乳で作る場合に当然、発酵とか保存の問題が出てくるわけですが、そこで生産プロセスに対する基準を設けています。それは有機ワインなどでも同じです。

私たちは、そうした救う製品のことを「プレシーディオ」（元々は軍隊用語で守備隊という意味）と呼び、守る、守られるべき製品のカタログを、国際的なレベルでどんどん作っています。例えば日本だと、ある種の黒豚や牛がそれに指定されています。他には「スローシティー」というプロジェクトがあって、ペルージャもそうですが、中心街が昔からの伝統的な街並みを残していて、かつその場所で伝統的に職人的に作られる生産物がある程度保存されている町を「スローシティー」と指定し、その保存活動もしています。

以上が私たちのスローフード運動の活動の概要です。

#### ◆小・中・高校で味覚教育の実践

【Q】「ラボラトーリオ」など三つのプロジェクトは、どれほどの規模や回数でやられているのでしょうか。

【A】スローフード協会の会員はイタリア全部で 7 万人、ペルージャ地区では 180 人です。「マスター」はだいたい 2 ヶ月に 1 回くらい開かれていて、180 人のうちそれぞれのコースに参加したのは、チーズが約 60 人、オリーブオイルが 80 人、サラミが 55 人、肉のコースは 100 人以上が参

加しました。「ラボラトリー」は1ヵ月に1回くらい開かれ、これも50～60人が参加します。参加人数は、どこでどんなテーマでやるかによって異なります。例えば北イタリアだと、ワインのコースをやると人が多く来ます。学校での味覚教育は、ペルージャ地区では最近始まったんですが、フィレンツェにセンターがあって、そこから講師が派遣されて各小学校でやります。ペルージャ地区では五つの小学校で今、実践されています。

【Q】教育プログラムには行政も参加しているのでしょうか。

【A】州とかが参加しているわけではありません。今、イタリアの学校は全部自主運営方式になっていて(注2)、国からの補助金の中で文化的教育とか味覚教育に対してある一定の割合が決められており、それを活用してやっています。具体的には、スローフード協会の方で、例えば野菜とかテーマを決め、それがどういうふうに栽培され、どういうふうに調理され、どういうふうな形で食べられるかというのを、学校に行ってデモンストレーションし、子供と一緒に考えたり食べたりという形でやっています。

#### ◆立ち止まってもう一回考えること

【Q】スローフード運動は一般の人、特に若い人たちからどう受け止められているのでしょうか。日本では、若い人たちは味覚的にも感覚的にも、ほぼ「マクドナルド」に象徴されるシステムに取り込まれてしまっているのですが…。

【A】スローフード協会ができた最初の頃は非常に低い評価で、単なる大食いとか大酒飲みとか言われていました。でも最近は、とりわけ若い人の間でもスローフード協会に対する評価とか認識が高くなっていて、例えば85年当時、協会の会員の平均年齢は50歳くらいだったのが、今は30歳台にまで下がっています。イタリアでは40～50%の若者が関心を持っていると言っているのではないのでしょうか。若い世代にとっては、食べることとか味わうことに対する快樂ということも重要なんですが、生物多様性ということが彼らの関心の中で一番大きなものとしてあって、スローフード運動をそういう生物多様性とか文化的多様性の中で捉え、評価しています。

もともとスローフード協会を最初に作った世代は、美味しく食べることに非常に重きをおいていたのですが、それが中心的だった時代は終わっています。若い世代は、味覚ということに関し

ては、子供の頃から非常に「分かりやすい」食品に慣れていて、味覚に関しては本当に豊かなものの複雑な味が分かるということに全然慣れていなくて、そういう意味では貧困なわけです。しかし、エコロジーとか生物多様性に関する関心から運動に入ってきて、その関心の中から、消費だけでなく生産とか流通に対してどういうふうに働きかけができるかというところで、いろんな新しいプロジェクトが生まれてきています。

そしてさらに彼らは、改めて味覚の再教育ということにも目覚めていっています。つまり、食べ物の味がちゃんと分らないと、その後ろにあるシステムや問題も評価できないということなので、そこから味の再教育ということも再び評価されているのです。全ての産業が工業化していく流れが1960年代にイタリアでもピークを迎える中で、ものを味わうことなく単に口の中に入れるということから、テーブルで時間をかけてものを食べることで、言わば食物そのものが私たちをそこで立ち止まらせて、考えさせる、そういう時間と場所が重要なのだと、私たちは考えています。この近くの町で今やっているスローフードのお祭りの中で、パンの上に豆を乗せたものを皆で食べた時に、パンがものすごく美味しくて、食べた人がみんな感動して沈黙してしまったというエピソードがありましたが、そういう形で、立ち止まってもう一回考えるというような機会です。

私はペルージャにいる日本の若者を何人か知っていますが、彼らはスローフードに興味を持っています。例えば、よつ葉で作っている生産物を使って、大阪の4～5ヵ所で、夕食会を組織して、そこで若い人たちも含めて、みんなで語り合うとか、そういう企画もできると思います。日本でも可能性はあるのではないのでしょうか。

良ければ、よつ葉連絡会のグループとして会員になって下さい。いろんな情報が入りますし、イタリアのスローフード運動がやっていることを参考にするだけでなく、実際にそのネットワークを使うことに関してはいつでも歓迎します。(つづく)

-----

--

注1:設立の際に発せられた「スローフード宣言」。

《悦楽の保持と権利のための国際運動》

我々の世紀は、工業文明の下に発達し、まず最初に自動車を発明することで、生活の形を作

ってきました。我々みんなが、スピードに束縛され、そして、我々の慣習を狂わせ、家庭のプライバシーまで侵害し、“ファーストフード”を食することを強いる“ファーストライフ”という共通のウィルスに感染しているのです。今こそ、ホモ・サピエンスは、この滅亡の危機へ向けて突き進もうとするスピードから、自らを解放しなければなりません。我々の穏やかな喜びを守るための唯一の道は、このファーストライフという全世界的狂気に立ち向かうことです。この狂乱を、効率とはき違える輩に対し、私たちは感性の喜びと、ゆっくりといつまでも持続する楽しみを保証する適量のワクチンを推奨するものであります。我々の反撃は、“スローフードな食卓”から始めるべきでありましょう。ぜひ、郷土料理の風味と豊かさを再発見し、かつファーストフードの没個性化を無効にしようではありませんか。生産性の名の下に、ファーストフードは、私たちの生き方を変え、環境と我々を取り巻く景色を脅かしているのです。ならば、スローフードこそは、今唯一の、そして真の前衛的回答なのです。真の文化は、趣向の貧困化ではなく、成長にこそあり、経験と知識との国際的交流によって推進することができるでしょう。スローフードは、より良い未来を約束します。スローフードは、シンボルであるかたつむりのように、この遅々たる歩みを、国際運動へと推し進めるために、多くの支持者たちを広く募るものであります。

注2:学校や教師との連携については、次回の「平和のテーブル」でも出てくるので、イタリアの初等・中等教育について簡単に紹介しておく。

「義務教育は5年制の小学校と3年制の中学校。3人の教師が一つの学級を担当するが、小・中学校は1クラス定員25名、障害児のいるクラスは生徒数最高20名。教育内容・方法については、手引き書としての「学習プログラム」はあるが、基本的には教師の工夫次第である。70年の州制度の発足にみられる70年代の『分権化』と『参加』の理念が教育制度にも反映し、74年、市町村・県・国の各レベルに評議会が設けられた。例えば、各学校の学校評議会は、教職員代表、父母代表、生徒代表(高校)からなり、教職員とともに、父母や生徒が学校運営に参加し、予算や行事、校則などを協議する機関である。」(明石書店刊『イタリアを知るための55章』より)

## 運動の再編を通して個人と「政治」を新たに結び直す

### —イタリア社会運動訪問・交流報告(2)「平和のテーブル」—

イタリア報告の第2回目は、イタリアの平和運動「平和のテーブル」です。若い女性が多いスタッフほぼ総出で応対していただきました。運動の概要についてはエレナ・ヴィトエラーレさんが、個々のプロジェクトについてはそれぞれの部門の担当者が活動を紹介してくれたのですが、編集の都合上、まとめて一つにさせていただきました。

#### ◆1995年の「人民の国連」が出発点

全体的な流れで言うと、「平和のテーブル」は、1980年代に非常に大きく盛り上がった反核運動—イタリアにも米軍やNATOの基地がたくさんあって、そこに核兵器が持ち込まれること、或いは原発建設の反対運動—が源となっています。それが後になって、もう少し一般的な反戦平和運動の形で展開するとともに、環境運動とか文化運動とか個々のテーマごとの運動を結びつけながら、一つの大きな運動になってきたのです。

具体的には1995年、国連50周年の催しでイタリアの反戦平和運動や人権・環境運動の組織がここペルージャに一堂に会して「人民の国連」が行なわれ、当時あまりうまく機能していなかった国連の改革を求める議論がなされました。また同時に、国連の改革を訴えた平和行進が行われ、10万人以上の人に参加して、大成功をおさめました。それを通じて各運動・組織の間に新しい関係が生まれ、それをその場限りのものに終わらせないで持続的な安定したものにするために、翌96年1月に「平和のテーブル」がそれをコーディネートする組織として生まれました。「平和のテーブル」にはイタリア各地の1000を超えるアソシエーションが参加しています。例えばARCI(文化・レクリエーション協会、詳細は報告(3)で紹介)も参加していて、そのARCIはイタリア中に支部があって、ネットワークがあります。だから、それぞれが緊密な独自のネットワークを持っていて、それがまた重なって組織されているわけです。さらに「平和のテーブル」には、アソシエーションだけではなく約350の地方政府・自治体—フィレンツェ、ローマ、ベネチア、ミラノなどの市レベルからトスカーナなど州レベルまで—が参加しています。

「平和のテーブル」が組織している国際的な大きな活動が、二つあります。一つは2年に1回このペルージャで開かれる「人民の国連」で、それには世界中から、とりわけ南側からの参加者が多いのですが、約150の代表が参加して、ペルージャで3日間、反戦平和の問題とか環境問題、経済問題とか人権の問題について討議します。もう一つが、ペルージャ・アッシジ間の平和



行進です。

皆さん、国連の新たな千年期へ向けての八つの提案を知っておられますか？ 2000年9月の国連総会で、「国連ミレニアム宣言」として八つの目標が具体的に示されました(注(1))。そして、この八つの基本的な目標に対して、各国政府が2015年までに具体的に行動することが義務づけられました。多分、日本でも始まっているのではないかと思います。「平和のテーブル」はこのキャンペーンのイタリアにおける実施主体の一つになっています。このプログラムに沿って来年2005年には、「貧困に対して」というテーマで全世界の統一行動日が決まっており、私たちも、その日に合わせて平和行進をします。また、今年の12月10日の人権の日に、それに向けた最初のプロジェクトを計画しています。

【写真】写真右がエレナ・ヴァイトエラーレさん



#### ◆年2回のセミナーで行動計画を論議

イタリア国内の運動で言えば、この運動が生まれた当時は、イタリアでは各個人と政治というもののレベルが分断されていた時代で、それを再び結びつけることがまず大きな目的でした。例えば、平和とか連帯という大きなキャンペーンの下にいろんな組織や運動を再編し直す。そうすることで、ローカルなレベルからナショナルなレベル、更にインターナショナルなレベルまでの政治というものに、もう一度個人を結び付け直すという形で、この運動は起こりました。とりわけいろんな組織—大きな組織もあれば小さな組織もあります—と地方自治体を結びつけるというのが、具体的な目標としてありました。

どういう方法でやっているかということ、1年に2回、全国レベルでセミナーを開きます。そのセミナーに各アソシエーションや地方自治体、学校や教師が参加して、ある特定のテーマについて議論します。例えば今年は、中東平和というテーマでイラクの問題や、とりわけイスラエル・パレスチナ問題について議論しました。その他、ここ数年やってきたのは、世界社会フォーラムに参加しようということで、反戦とか公正な国際政治をどう創り出すかとか、そういうテーマに関してセミナーを開いてきました。で、このセミナーで具体的にどういうプログラムでやるかということ話を合って、参加した地方自治体なり各組織が自分たちの場所に帰ってそれを具体的に実践していく。「平和のテーブル」は、そうした参集点としての働きをしています。

地方自治体関係のプロジェクトでは、「里親」というプロジェクトもあります。これは、地方自治体が世界各国のアソシエーションの中からある1人の人の「里親」になり、彼らがイタリアに来て「人民の国連」に参加するための費用を全部出します。それを「里親」と比喩的に言っているわけですが、そのことで、まず一つにはイタリアの地方自治体に外国の具体的な状況についてよく知ってもらうということ、それと、その人を通じてその後、関係を持続するという二つの主旨です。

#### ◆「平和教育プログラム」

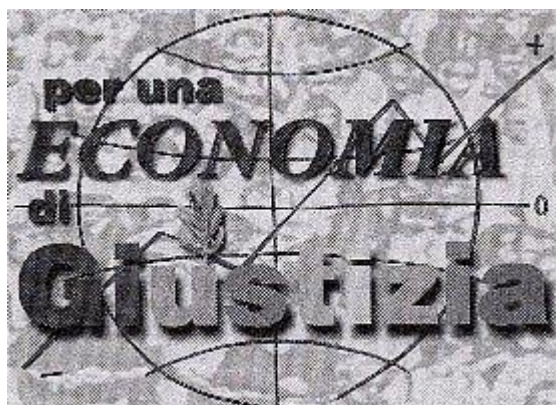
もう一つ、今取り組んでいるのが、平和教育プロジェクトです。具体的には、「平和のテーブル」の側から各学校に対して、平和の問題に関して何でもいから何かやって下さいという提案をして、各学校で、今の段階では先生がどういうことをやるかを決めて、授業に組み込むということです。その中で何か必要な材料とかがあれば、それは「平和のテーブル」から提供します。専用のインターネットサイトがあって、そこに各学校がどういうプロジェクトをやっているかというのを、全部載せています。そのサイトを通して、例えばシチリアの学校がミラノの学校のやっているプロジェクトが面白そうだということになれば、シチリアの学校とミラノの学校と一緒にそれを協同してやるというようなことが、各学校間で自主的に進んでいくのです。それが何故重要かということ、とりわけ平和運動に関わっている学校教師は、言わば自分の仕事以外のところで知られることなくやっているの、どうしても孤立した状態になり易い。でも、こういうことをやることで、自分だけじゃないんだということがすごくよくわかり、その意味で、平和教育

を推進するのに非常に重要な交流の場としての役割を果たしているのです。このサイトはアクセスの数が多くて、なかなかつながらないくらいです。

来年からは、テーマに関しては生徒が自分たちで決めるような方向でやっていきたいと思っています。

注(1):国連ミレニアム宣言は、以下の8項目。1.価値と原則(自由・平等・連帯・寛容・自然の尊重・責任の分担)、2.平和、安全保障および軍縮、3.開発と貧困、4.私たちが共有する環境の保護、5.人権、民主主義、およびよい統治、6.弱者の保護、7.アフリカの特殊なニーズへの対応、8.国連の強化。

【写真】“We, the peoples of the United Nations for an Economy with Justice”



◆イラク攻撃直後は運動に敗北感が

(Q)日本もそうなのですが、イタリアもイラクに派兵しています。イラク反戦運動の現状はどのようなのでしょうか。

(A)イタリアのイラク撤退を求める全国的なデモは、「平和のテーブル」が組織しています。イタリアの女性2人が人質になった時もそうでした。主要都市の広場などにおけるデモだけではなく、政府や自治体といろんなチャンネルを使って議論して説得するという事もやっています。軍隊の力を使うのではなく、イラクをどう援助できるかというオルタナティブをいろいろ実際に提案しています。軍事介入は、国際法に照らしても違法なものだからです。

今年2月15日の反戦デモには、イタリア全土で200万人が参加しました。世界の中でも非常に多い参加者でした。ところが、3月にアメリカ軍がイラク攻撃を始めた後の4月12日のデモは、50万人以上は参加したのですが、運動に関わった人の中には敗北感が漂い、非常に困難な時期でした。でも、それから毎月少なくとも一度は、全国的なレベルでデモをやってきました。それは反戦平和ということだけではなくて、例えば労働者の権利や失業の問題、移民の問題、年金の問題、学校改革の問題だとかと合わせてやっています。毎回、全国で20~40万人くらいの人が参加しますが、若者から年配の人まで、イタリアでは皆問題を抱えているので、多くの人デモに参加するのです(笑い)。

(Q)日本では、各地にいろいろな動きはあるのですが、全国的な統一した運動は作りきれいていません…。

(A)全国的にどう組織するかという問題に関しては、例えば今年2月のデモでは、イタリアには三つの大きな全国レベルの労働組合がありますが、そのうちの二つが組織化に積極的に参加しました。毎週ローマで、どう組織するかとか、当然いろんな組織によって立場とか方法論とかが全然違うわけですが、それをどう一つにまとめるか、ずっと議論して、それを基に「平和のテーブル」が情報をナショナルなレベルからローカルなレベルまでの組織に全部配りました。

それだけではなくて、ラジオや新聞を使って、とりわけ左派の新聞を使って広告も出します。左派の新聞の場合は無料で掲載してくれることもあるのですが、広告にはどうしてもお金がかかるので全国紙・雑誌とかを使うのはなかなか難しく、各組織やアソシエーションがそれぞれ持っている媒体を最大限に使うようにしています。インターネットも最大限に利用、専用サイトを作り、そこに全ての情報を載せてアクセスできるようにしました。あとはやはり、口伝えというのが非常に大きいですね。

もう一つ、「平和のテーブル」に参加している各地方自治体への働きかけがあります。そこに全ての情報を送って、その自治体が「平和のテーブル」に参加していない周辺の自治体に情報やポスターを配る。それから、デモに参加するためのバスとか電車を特別に格安の料金で走らせるようにする、という組織化もやっています。

◆一緒にやることの喜び・楽しさ

〔Q〕学校での平和教育プログラムについて、もう少し詳しく説明して下さい。

〔A〕例えばペルージャの小学校では、おもちゃを使いながら暴力と非暴力についてゲームの中で学ばせていくとか、頭にその人のキャラクター、例えば「退屈な人」とか「私にしゃべりかけないで」と書いたものを付けて、本人には見えないが皆それにしたがってその人に応対し、言わば集団の中で自分がどういう存在なのかをイメージしていく、というようなゲームなどを行っています。

ペルージャは移民が多いので、宗教や皮膚の色が違う子供たちがいっぱいいるわけで、その中でゲームへの参加を通して、皆で一緒に一つのことをやることの喜びとか楽しさ、1人でやったらこれしかできなくても皆でやったらこういうことが生み出せることを学ぶ、というようなことをやっています。

（ここで皆で実際にやってみる。足を互いにからませ、肩を組んで輪になって、掛け声に合わせて踊る？ステップを踏む？）

今やったゲームではそれぞれが勝手に動くとかケてしまうわけで、コケないように皆が合わせて動くという形で、身体で他の人と一緒に何かをやるということを学んでいくのです。ゲームは他にもたくさんあって、それに関する本もあり、それを学校の先生たちが参考にしています。

【写真】イタリアから始まった「PEACE」の旗を前に



◆参加自治体が住民数に応じ予算を

〔Q〕「平和のテーブル」には政党も参加しているのでしょうか。

〔A〕政党は参加していません。そういう政治勢力からは自立した立場の運動です。かと言って全然コンタクトがないわけではなく、常に対話やロビー活動などを通じて政治に介入するようにしています。私たちの立場は中道左派からより左に近いわけですが、左派勢力に対する活動としては、彼らの政治の中にインターナショナルなレベルから国内政治のレベルまで、「平和のテーブル」が実践しているような課題を組み込んでいくために活動しています。また、現在の中道右派政府に対しては、例えばイラクで実際にどういうことが起きているかとか、それに対する国際政治の動向についての情報を伝える、というのが主な作業になっています。

〔Q〕「平和のテーブル」の全体的な組織構成や運営、財政について説明して下さい。

〔A〕「平和のテーブル」には、基本的には支部とかはありません。ここ2年のうちに、「平和のテーブル」と思想・方法論を共有する小さな組織が各地で同じ名前で誕生していて、「平和のテーブル」の思想と実践を各地で具体的に再生産しています。しかし、それぞれが全部自律的な組織で、ペルージャの「平和のテーブル」の本部が何か指令を出してやっているということは全くありません。言わばコンサルタントみたいな立場で、例えば平和教育に関して誰か経験者を送ってくれと言われればそういう人を送るし、そういう形で人や情報の交換・交流が行われるわけで、各組織は自律的に地域で活動しています。

運営については、1995年の「平和のテーブル」が誕生した時の集会に参加した30～35の組織にそれぞれ1人の「平和のテーブル」担当の代表者がいて、その代表者で構成する「幹事会」があり、そこで行動計画を決めます。その行動計画を、前述の200以上の全国のアソシエーションや地方自治体の代表者が参加するセミナーの議論にかけ、その議論の結果として、具体的に何をやるかを決めていくという形をとっています。

予算については、参加している地方自治体が住民数に比例した予算を出し合っており、「人民の国連」についても全部そこから予算が出されています。この事務所も、元修道院でペルージャ市の持ち物だったのですが、ペルージャのいろんなアソシエーションが無料で使えるようになっており、今40のアソシエーションが入っています。また、スタッフはもともと全部ボランティアですが、全国的な組織の中心で毎日事務所を開けて対応しなくてはならないということで、地方自治体から出ている予算の中から最低限のサラリーはもらっています。でも、活動の多くの時間はボランティアとしてやっています。

〔Q〕日本では補助金を含めた行政の支援をとりつけるのはかなり困難ですし、補助金を通した締めつけもあります…。

〔A〕それはイタリアでも非常に難しく、日本とそんなに状況が変わるわけではないと思います。如何に市長とかを説得するかということでは、やはり選挙で明確な形でプレッシャーをかけます。例えば、平和のための予算を政治プログラムの中に入れることを、はっきり住民の側から要求する。そういうことを長年やっていると、それで選ばれる市長が出てくる。そこからまた他へ展開させていくのです。もともとは、80年代に反核運動が非常に盛り上がった時にそういう形が確立していった、それが今に受け継がれているのです。

もちろん、金銭面でも人脈面でも全くの空白地帯というのはいくらでもあるわけで、そういうところのアソシエーションがそれでも何とかやろうというのを、「平和のテーブル」はなるべく支援するようにしています。平和運動といっても、もちろん出発点のポイントはいくらでもあるわけで、例えば環境問題とかマイノリティの問題とか社会保障の問題とか、そういう具体的な問題から出発して作っていく。いろんな矛盾の接点を見つけて、そこから運動を展開していくようにしています。

#### ◆世代交代・継承が困難な課題

〔Q〕この事務所には年配の人や男性があまりいないようですが…。

〔A〕このペルージャの事務所は全国的情報を統括しているところですが、ここで働いているのはほとんど私くらいの年代の女性です。しかし、セミナーに全国から参加してくる人たちはもっと年配の方が多くて、だいたい平均年齢は40～50歳くらいで、全体的に言えば女性より男性の方が多いのではないのでしょうか。イタリアでは会社とか地方自治体だけでなく、アソシエーションの責任者もだいたい男性ばかりで、それは問題だと思います。

もう一つ、新しい若い世代への継承に関しても非常に困難を抱えています。世代交代や継承が、やはりできていません。若い人たちは、別に若者だけのアソシエーションを作っていて、断絶しているのです。しかし、2月15日の反戦平和の国際運動の時に、すごく多数の若者が参加しました。これは画期的な出来事で、これをきっかけに、反戦平和運動や平和教育、反グローバリズムの問題について若者の参加が進んでいます。

〔Q〕日本の運動とのつながりはありますか。

〔A〕今日のような機会は、私たちにとってうれしいことで、特に平和運動をやっている違う国の人たちの間で経験やエネルギーを交換する機会は大事だと思っています。80年代には原水禁運動とわりと緊密な関係もあって、日本からの資料もあります。その後、下火になっていましたが、来年は広島・長崎 60 年ということで、もう一度、再組織化しようと思っています。あなた方も、前述の「里親」制度で代表を送り、来年 10 月の平和行進にぜひ参加して下さい。

### 今いろいろと心に刺激を感じているところです

10 月 8 日(金)～16 日(土)まで、イタリア旅行団に興味をもって参加させていただきました。平和のテーブルは 11 日(月)に訪問、古い修道院の建物で 3 階建ぐらいだったと思います。平和のテーブルの部屋は 2 階にあり、女性の若い人ばかり 10 名ぐらいの方が、いくつかの部屋に分かれて仕事をされておられました。その時びっくり、子猫が 2～3 匹、その人達に抱かれていました。聞いてはいたのですが、通訳の K さんも猫の研究のためにイタリアに来ていることと重なって納得しました。動物を大事にしている国だなあと思いました。

皆さんにお話をうかがいました。平和のテーブルの運動には、1000 を超えるアソシエーションが参加し、州・県・市町村レベルの自治体も参加して、予算を出しているとのこと。いいですね。平和教育では、各学校に平和の提案をして、学校の授業の中に組みこまれているそうです。平和教育のサイトのアドレス《[www.scuole.olipacc.it](http://www.scuole.olipacc.it)》を、メモに記入してもらいました。シチリアとミラノの学校が一緒に取り組み、自分だけではないということがわかることが大事というお話が印象に残っています。今年の 2 月 15 日の反戦デモはイタリアで 200 万人が参加、毎月 1 回のデモにも 20～40 万人が参加し、デモの情報はラジオ、新聞、テレビ、広告、全国紙、アソシエーションの機関紙、インターネットなどで知らせるとのお話も、日本の現状と比べて感心させられました。

お話をうかがった中の 2 人の方が平和のテーブルに参加された理由は、1 人は大学で政治学を学び、その中で経済における不公正や富の偏在に目を開いていったとのこと。もう一人の方は、「初めは翻訳の仕事をしていたのですが、自分のみの仕事で公正・正義という自分の理想と違うと思うようになり、2001 年のジェノバでの反 G8 のデモに子供から老人まで参加した時に、学生が殺され、その時に何かしなくては、思って」運動に参加されたそうです。



イタリア旅行団に参加して、伊江島の阿波根昌鴻さんのことばを思い出しました。「国の政治に無知では、人類が住みやすい平和で幸福な社会を作るとはむずかしい。また、広い知識があっても、心が正しくないと、真の平和の実現はない」—今いろいろと心に刺激を感じているところです。(吾孫子勝代)

### 遺伝子に組み込まれたアソシエーションの伝統

#### —イタリア社会運動訪問・交流報告(3) ARCI・人民の家—

イタリア報告第3回目は、フィレンツェの「文化・レクリエーション協会(ARCI)」と「人民の家」。実は、松田博さんからの助言で ARCI に連絡を取り、訪問することになったのだが、ARCI と人民の家との関係が勉強不足で今イチ解らず、ガイド役のKさんともども「何で人民の家じゃなくて ARCI なんだろうかねえ」と一抹の不安を抱きながらの訪問だった。しかし、以下に紹介する協カスタッフ・テチアーナさんと代表者・ビッジさんの説明を聞いて、充分納得。ARCI の事務所でスライドを交えた説明の後には、イタリア全土が解放された「4月25日」をそのまま名前とした「由緒ある」人民の家で昼食会。昼食会には、パルチザンだったお兄さんが1944年7月、この人民の家の近くでファシストに拷問のうえ虐殺された体験を持つジョゼティーナさんにもゲストとして参加していただいた。他の訪問先にも共通することだが、突然連絡してきた外国の見ず知らずの市民グループを親切丁寧に歓待してくれた上記の方々、そして全てのスケジュールをコーディネートし、風邪で声が出ないにもかかわらず当日もガイドしてくれたマオリツォさんに、改めて感謝、多謝。にしても、「遺伝子に組み込まれた伝統」には、決して誇張ではなく「さもありません」と思わせるところもあって、参りました！

#### ◆アソシエーションイズムの重要性

今日はようこそいらっしゃいました。ここが ARCI の資料室で、私はボローニャ大学で歴史学

をやっている研究員で、協力スタッフのテチアーナです。ここはアソシエーションズムに関する記録の保存室ですが、イタリアの中で唯一そういう活動をしている所で、フィレンツェ大学とボローニャ大学の協力で活動しています。現在の活動の中心としては、アソシエーションズムに関するいろんな資料、写真などが劣化していくのをデジタル化して保存し、その価値を再評価して、それを外に知らせていくという活動をしています。私の研究テーマはアソシエーションズムで、これが最近、社会科学、歴史学とか人類学とか社会学で重要視されているのは、地域の社会教育においてアソシエーションが非常に重要だという認識が高まってきたからです。アソシエーションズムは、労働者の解放のために根本的な役割を果たすもので、民衆教育に貢献するものであり、新たな現代的文化モデルを広めるために非常に重要な役割を果たします。

とりわけこのアソシエーションズムがトスカーナで重要な理由は、二つあります。一つは数が多いということです。イタリアという国ができたのは 1861 年ですが、その当時からヨーロッパの中で最もアソシエーションの密度が高い地域です。例えばフィレンツェ県だけを見ても、人民の家など 292 のセンターに約 7 万人が参加しているということを見ても、そのことはよく分かります。二つ目は、制度的にも重要だということです。つまり、1957 年 6 月にこのトスカーナで、重要なセンターである ARCI が誕生したということです。

#### ◆互助会から開かれた「人民の家」へ

イタリア統一の 1861 年から ARCI が誕生した 1957 年までの期間を三つに分けると、1861～1925 年、1926～1945 年、1946～1957 年の三つになります。1925 年で区切りが入っているのは、22 年にファシスト政権が成立して、それがすべてのアソシエーション活動を禁止したのが 25 年です。そこから終戦の 45 年までは言わば暗黒の時代で、それが第 2 期です。そこからアルチが誕生するまでの第 3 期、というふうに分かります。

1861 年から 25 年までの第 1 期は、人民のアソシエーションズムの最初の発展の時期です。新しい憲法がアソシエーションの自由を認めたからです。最初の重要なアソシエーションは互助会、共済組合で、参加者がそれぞれお金を出し合って、例えば病気の時に補助金が貰えるという相互扶助システムです。当時、病気の時には毎日 1～2 リラ、パンにすると 3～6 キロのパンが貰えたということです。障害を受けたり、年老いて働けなくなった場合も貰えました。アソシエ

ーションはさらに、他の副次的な活動も促進しました。例えば、サークルとかバールとかカフェとか劇場とかの経営、パン屋とか薬屋などの小売り商店の活動も促進しました。

同じくこの時期に、余暇の時間に行うレクリエーション活動も発展しました。それは強い文化的次元を持ったものです。トスカーナでは例えば、音楽活動が非常に広く行われ、バンドとかオーケストラを持った音楽団体がいろいろありました。スポーツの分野では、自転車が非常に重要です。他には演劇活動、いろんなアートの教育のための組織。また、極く限られたケースを除いて各アソシエーションは、ほとんど必ずそれぞれの図書館を持っていました。

19世紀の終わりくらいから、そうしたアソシエーションに「人民の家」という名称がつけられ始めました。その場所が単に会員だけではなくて全ての人々に開かれたものであるということを強調するために、この名称が使われるようになったのです。人民の家という場所は、民衆にとって仕事の後とか休日に集まって、一つの集合的な場を自分たちで経営・運営するという経験を行うことが可能な場所になりました。そこでは、いろんな社会的活動—文化的余暇活動、図書館での教育活動とか救急活動など—が進められました。人民の家の中には、カードゲームをする場所、劇場、ダンスホール、体育館、お祭りの時に皆でパーティーをする場所などが作られました。

【写真】民衆が自力で「人民の家」を建設（1912年）



#### ◆ファシズムや政府の攻撃に抗して

1925年、ファシズムが労働者のアソシエーションを法律で禁止し、全て解散させます。それは何

故かという、人民の家に代表されるアソシエーションの場が、労働者が自分たちで運営し、かつそれで積極的な結果を出すことができる、そういう労働者の存在を示すシンボルになっていたからです。

だから、ファシズムは人民の家や互助会を明確なターゲットにして、暴力的な形で攻撃しました。具体的には、文書が保存されていた所を燃やしたり破壊したり、旗とか本とか家具とかを燃やしたりしました。ファシズムが政権をとった際には、彼らは人民の家を接收し、「ファシズムの家」にしました。

1945年に戦争が終わるまでは、アソシエーション活動は一切ありませんでした。戦後すぐに、民衆のアソシエーション活動は自発的に再開されました。人々は元々の人民の家に再び集まってくる、そこで文化的活動の新しい時代を拓き始めたのです。そして、今までの伝統的な演劇活動や音楽活動に加えて、絵画とか映画とか彫刻などの視覚芸術の展覧会を組織したり、公開で小説の朗読会をしたりということをやりました。さらに、「各人民の家に一つの図書館を」というモットーで、それが広がっていきました。フィレンツェは其中でも最も活動的なセンターで、全国的にも前衛的と言っていいほど最も良く組織された都市でした。

この1945年から57年の時期のとりわけ52年から55年までの時期は、新たな危機の時代でした。今度はファシズムではなく、政府から攻撃がかけられたのです。ということかという、戦時中にファシストが人民の家を全部自分たちのものにしますが、そのファシストの所有物が戦後、全部政府のものになり、人民の家も自動的に政府のものになりました。それで政府は、人民の家からの立ち退きを要求してきました。例えば52年にはフィレンツェ県の18の人民の家が売りに出すと脅しをかけられました。53年には3つの人民の家が立ち退きになり、5つが売られてしまいました。54年には15が立ち退きになって、55年には5つがさらに立ち退きになり、つまりこの4年間に23の人民の家が立ち退きになったのです。

そういうふうにどんどん立ち退きになったことによって、政党の事務所などがなくなっただけではなく、公共サービスも失われてしまいました。救急サービスとか体育館、劇場とか人々が出会う場所、朗読室、庭、放課後活動の場所、保育園、そういう活動もなくなってしまいました。この時代には、イタリアでは福祉がほとんどなく、民衆のアソシエーションによって支えられていたのが、全部なくなってしまったのです。

それに対して民衆の側からデモとかストライキとかいろんな形で抗議運動が起こり、その連帯

の中から新しい人民参加の活動が生まれてきました。つまり、民衆が自らお金を出し合って、そのお金で新しい人民の家を買うなり建てるなりする、お金を出すだけじゃなくて仕事の後とか休日に、無償で建設活動に携わったのです。こうして 45 年から 55 年の 10 年間に、168 の新しい人民の家が公認されるか建てられるかしました。

労働者を文化的に高めるという機能

どんどん新しい人民の家ができてその活動が拡大していくわけですが、政府との間の緊張関係はずっと続きました。政府は、要するに文化的な活動やレクリエーション活動と政治活動をはっきりと区別させようという方向で管理するわけです。この政府の文化活動と政治活動を分けるという方針は、フィレンツェにおけるアソシエーションイズムの伝統を無視、蔑ろにするものでした。

運動としての課題もありました。それは、それぞれ自発的に新しくできた個々の人民の家をどう結んである一つの統一的な活動にするか、という問題です。いろんな議論や対立がある中で、フィレンツェでは 1957 年 6 月、イタリア文化レクリエーション協会という名前で、一つの組織体として ARCI が組織されます。ARCI は、政府から完全に自立した組織体として、文化活動、民衆の余暇活動の中で、その活動を自律的に組織・運営する場所として生まれました。

ARCI とそれまでの互助会とか人民の家という伝統的なモデルとの間の連続性というのは、とりわけ労働者を文化的に高めるという機能に対して非常に意識的だったということです。それは ARCI の憲章の一節をみてもよく分かります。そこには ARCI 目標として、「物理的な意味での健康の改善の他に、道徳的かつ知的な意味で労働者を向上させる」とあります。つまり、レクリエーション活動、教育活動、文化活動、観光、スポーツ、社会保障 etc. それぞれの分野において労働者の意識を高めるということです。

【写真】1960 年代の「人民の家」



◆今なお続く政府との緊張関係

私はこの ARCI の責任者、フランコ・ビッジです。今の話の中の ARCI とか人民の家が戦後、政府といろいろ緊張があったという時代のことを、もう少し詳しくお話したいと思います。というのも、その時代の跡が今まだ残っているからです。

この地域が解放されたのは 1944 年ですが、当時は戦後の選挙までファシスト政権以前の王制が復活していて、そのサルディニア王家の法律でファシストのものだったものは政府のものにするという条例が 44 年に出されます。それによって人民の家も政府のものになったのです。政府のものになった後、立ち退きになって新しい所を作らないといけなくなったわけですが、この状態はまだ残っていて、最近も元々の人民の家をようやく買い戻した所もあるし、まだいまだにその場所を借りて活動するために政府に賃貸料を払っている所もあります。

結局、人民の家がバラバラになったということで逆にそれが ARCI を誕生させることになるわけですが…。1957 年の ARCI 成立の際、フィレンツェでは大部分の人民の家が ARCI に登録したんですが、文化活動をするための内務省の認可が必要で、警察にも行ったけれども貰えなくて、結局貰えたのは 1967 年 8 月になってからでした。この 10 年間は、政府の中の虚構の労働者組織を書類上作って、実際は ARCI が組織運営しているんだけど、政府組織として認可させて、でも実質は ARCI の活動だということでやっていました。

◆問題別にどんどん広がってきた ARCI

1967年8月以降、自由に活動できるようになるわけですが、当時の重要な文化的活動として、映画と演劇があります。映画は、だいたい各 ARCI には映画室があって、イタリア映画だけではなくアメリカとかソ連映画などの上映をやっていました。演劇も非常に重要で、後で有名になる多くの人々が ARCI のサークルを回って芝居をやっていました。

それから、1966年に大洪水でフィレンツェ中が水浸しになり、貴重な美術品も全部水浸しになって、世界中からボランティアの人が来て修復するということがあったんですが、これをきっかけに人民の家が市民の中で一層重要な意味を持つようになりました。つまり、人民の家がいろいろな救援物資や人々の結集・参集点になったのです。

【写真】左からビッジ、マオリツォ、ジョゼティーナさん



1971年にフィレンツェで ARCI の全国会議が行われ、この時点で ARCI はイタリア社会において重要な存在になったわけですが、この時はまだレクリエーション文化協会ということで、そういう活動だけに限定されていました。それから数年の間に、狩猟とか魚釣りとかのいろんな分野で ARCI がいろいろできてきて、それが 76 年のナポリの全国会議で統合され、大きな一つの全国的な ARCI が誕生します。

76 年の後、この統一は 1987 年まで続きます。その間に、スローフード運動の前身になった団体とかいろんな団体がどんどん生まれていったのですが、87 年の全国会議でこの統一はなくなり、連合組織としては残るものの、統一組織としての ARCI はなくなって個々に分かれます。大きな問題としては予算の問題があって、文化活動というのはだいたい収入は少なくて支出は大きいという活動で、そういう予算の問題が大きかったんですが、どんどん組織が大きくな

っていったって、それを統一的に管理・運営することが難しくなっていくということもあります。それから、1968 年の「暑い秋」と呼ばれる運動があったわけですが、それ以降の思想として、何か一つの大きな組織の中でみんな一緒にやるというよりも、個々に独立してそれぞれがそれぞれの興味や問題に対応しながらやるという考え方が拡がり、さらに新しい問題が出てきてどんどん細分化・専門化していったことも関係しているだろうと思います。例えばそういう中で、新しくできたエコロジーとか環境問題に関わるグループと狩猟をレクリエーションとしてやるグループの間には、当然意見の対立が起こるわけで、そういうこともありました。

文化・レクリエーションという分野だけでなく、前述したようにいろんな新しい問題が出てきて新しい分野にどんどん入っていくので、ARCI もどんどん拡がってきました。例えば移民の問題とか刑務所の囚人の待遇の問題、麻薬・アルコール中毒とか、そういう形で問題別に拡がっていくわけです。それが今日の ARCI の姿ですが、人々の出会いの場、集まる場としての人民の家の役割はなくなっているわけではなくて、例えば家のない移民の人がきたり、そういう形で昔とは形は違うんですが、参集点としての役割は続いています。

#### ◆中世からの市民社会の伝統

Q: フィレンツェに人民の家が多かったのは、何か理由があるのでしょうか？

A: フィレンツェはルネッサンスの街ですが、中世にまで逆上れるような一種の市民社会の伝統があって、その中で自分たちでアソシエーションとか連帯を作るというのが、言わば遺伝子に組み込まれた伝統としてあるからです。フィレンツェは中世から職人の街といわれ、同業者組合の伝統がありました。それもあるのですが、19 世紀末における重要な違いとして銘記しておかねばいけないのは、同業者だけの組合からあらゆる人に開かれたアソシエーションに性格を変えたということで、そこは強調しておきたいと思います。19 世紀末の社会主義運動がトスカーナでは強く、フィレンツェはイタリアの大都市の中で最初に左派が統治した街で、それと中世に逆上れるような兄弟愛的な連帯活動の伝統が結びついたというのが大きな理由だと思います。

とりわけ人民の家が多いのはトスカーナ、エミリア、ロマーニャ州が中心で、あとはリグーリア、ピエモンテ、マルケ、ウンブリア州の一部で、中北部でアソシエーションの伝統が強く、南部には



そういう伝統はあまりありません。ただ、例えばテーマ毎に音楽だとか映画だとか、言わばヴァーチャルなアソシエーションもあって、これは北部でも南部でもたくさんあります。

Q:ARCI や人民の家の運営や資金は？

A:それぞれの人民の家や団体が、ARCIに加入費として年間 150 ユーロ払っています。全国で 5000 の ARCI の団体があって、トスカーナでは 1360 あります。個人会員は年会費が 9~20 ユーロ、多くは 15 ユーロで、トスカーナで 22 万人の会員がいます。それ以外に、いろんな公共サービスを、政府や地方自治体が直接やるのではなくてその代理人としてやって、その分のお金を後から国なり地方自治体からもらうということもやっています。

人民の家の運営については、会員の「議会」があって、そこから経営・運営委員会が選出され、その中から代表が選出されます。だいたい 3 年くらいの任期ですが、そのまま 30 年やったりする人もいます(笑い)。

人民の家は 1945 年以降、特に生協の活動と歩みを共にしてきました。生協も元々は小さい生協がたくさんあったんですが、それが 1950~60 年代にかけて一つの大きな生協になって、現在に至っています。今では人民の家というよりは ARCI のレベルで協同のプロジェクトをいろいろやっていて、例えば最近では、アフリカやラテンアメリカの貧しい子どもたちの里親になるプロジェクトと一緒にやっています。そうした経過もあり、ARCI と生協の会員はだいたい重なっています。

#### ◆問題は女性の会員が少ないこと

Q:お金持ちや企業からの寄付とかもあるのでしょうか？

A:それはありません。最初の互助会的时候には名誉会員というのがあって、お金持ちが慈善行為として多額のお金を寄付するということをやっていました。しかし、19 世紀の終わりから社会主義の傾向が強くなる中で、人民の家の取り決めの中で名誉会員はなしと、つまり慈善という考え方を否定したのです。

Q:会員の権利や特典は？

A:どこかで会費を払っていれば、イタリア中で活動に参加できます。メリットとしては映画や芝居を見るときに割引があったり、ARCI の活動に使った費用は無課税とかがありますが、そうい

う経済的な割引とかの問題ではなくて、ARCI に加入することの一番重要な意味は、倫理的・政治的な意味、つまり自分が参加してこの組織を支えているというのが重要なのです。

Q:人民の家にはだいたい左翼政党の事務所もありますが、人民の家と政党の関係は？

A:人民の家は、基本的には政党から自立したものです。が、人民の家の会員のかなりの部分が左翼民主党なり共産主義再建党の党员なので、その事務所もあるのです。

Q:ARCI や人民の家の会員で、若い人は増えていますか？

A:やはり 1980 年代くらいのところで世代間の断絶があって、若い人が入ってこなくなりました。でも、ここ 10 年で回復しつつあります。多分、グローバル化に対する意識が高まるのと共に参加意識も再び高まってきて、回復してきているのではないかと思います。イタリアではこの 12 月まで徴兵義務があったのですが、兵役に行くかわりに社会サービスを 1 年やるという選択もあって、その機会を ARCI が提供しているということもあるのかもしれませんが、でも、もっと問題なのは女性の会員が少ないということです。

## ●エピソード(1)

フィレンツェ 「左翼」の風に吹かれて

僕は、フェリーニの映画が好きだ。「アマルコルド」辺りから同時代的に観ている。クラウド・ア・カルディナーレは綺麗だ。ミーナの「砂に消えた涙」を聞くと、今でも胸キュンだ。昔、ポリーニに狂っている女の子がいた。大雑把に云えばこんなもんだ。

ARCI を訪問して、そこのオッサンの案内で殺されたレジスタントの名を冠した「人民の家」で昼飯を食った。彼は「左翼民主党」の党员証を見せてくれた。僕は臆面もなく、ベルリンゲルのことをどう思うか聞いてみた。彼は「bravo」と云った(と思う)。まあ、りっぱだ、偉大だった、えらかった、みたいなことなんだろう。この後の展開として、僕が「いや、テツゾウ・フワもりっぱだ、よくやった」と云っておもむろに、有効期限切れの「日本共産党」の党员証を取り出す。そして「我が同志よ」とお互い抱き合うということも、ありえたかもしれない。

基本としては、今回の成果を持って帰って、自分の持ち場なり陣地でどういかしていくかということになります。瀬戸田に帰ってすぐ、農場に「人民の家」をつくるぞ、と大言壮語しました。で、オノレの依拠する場所は存在するかなど、色々悩みはありますし、或る人に云わせれば、僕

は大衆活動には向いていないとのことでもあります。まあ、めげずにがんばって、陣地を構築、拡大する所存であります。(桑名 泉)

【写真】旗と桑名氏



## ●エピソード(2)

「オーッ！」とか「へっ！」とか感嘆の連続

フィレンツェ郊外「人民の家」訪問記

ARCI を訪問した日の夜、他の人民の家も見ておこうということで、みんなでフィレンツェ郊外の住宅地にある人民の家を訪れた。週日の夜だったこともあって閑散としており、居たのは夕食後に一杯ひっかけに来たらしき年金暮らしの労働者のグループと、アフリカからの出稼ぎ労働者 2 人のみ。

しばらく労働者グループと雑談。「支持政党は？」と 3 人に聞いてみると、全員が「共産主義再建党だよ」。他でもそうだったが、支持政党についてはみんな、何のてらいもなくはっきりと答えてくれる。「年金はどれくらい？」「11~12 万円くらいかな」、「歳は？」「55 歳さ」、「55 歳で年金暮らしって、早過ぎない？」「いや、中学を卒業してから工事の仕事を 30 年、よく働いたからもういいのさ」…そうこうしているうちに「今、テレビでサッカーの試合を見ていたんだけど」と駆けつけてくれたのが、ファナリ・モレノさん。誰かが呼びに行ってくれたらしい。

金属関係の仕事をしていて、同じく年金生活者のモレノさん、多分労働組合の活動家だったのだろう、今はこの人民の家の在庫管理を担当しているのだそうだ。来訪の趣旨を聞くと、「分

かった。私に任せなさい」。やおら鍵の束を取り出し、隈なく全館を案内してくれた。それから、「オーッ！」とか「へ〜ッ！」とか感嘆の連続。

来た時は暗くて分からず、割りとこじんまりした 2 階建の建物だと思っていたのだが、さにあらず。渡り廊下を渡った奥には、100 人はゆうに入れそうなレストラン、屋外カフェテラス、ギャラリー、ダンスホール etc.順次増築していったのそうだ。「私も若い頃、建てるのを手伝ったよ」と若干得意そうにモレノさん。「金曜日の夜に来てくれれば賑やかなんだけどねぇ」とも。本館に戻って、40 人くらいの集会室、政党とこの人民の家の事務室。グラムシとベルリッゲルのポスターを見つけたKさんとMさんは、早速記念撮影。

いかにも「労働者らしい」フランクさと親切さで小 1 時間にわたり付き合ってくれたモレノさんは、さらにバス停まで送り、バスが出るまで見送ってくれた。バス停までの道すがら、「女性の参加が少ない」という昼の話を思い出し、奥さんはどうなのか聞いてみた。「いや、いつも誘ってはいるんだけどねぇ。たまにダンスパーティに来てくれるくらいで、なかなかだよ」と苦笑い…やはり、イタリア人民の家にとって「最大の難関は女性参加」、というのは本当らしい。(つ)

【写真】モレノさん(左から 4 人目)と一緒に記念撮影



第 12 号(2004 年 11 月 1 日)

第 13 号(2004 年 11 月 16 日)

第 14 号(2005 年 1 月 1 日)